

よく、神に捨てられたと言うが、神はめったに捨てはしない。  
みな、人間の方から神を捨てるのである。

……「天地は語る」第三十六条……

## 解説

「神に捨てられた」との思いは『これほど信心するのに、どうしてもこういう事が出来るであろうか……（御理解第四十二節）』との思いと同じであって、それで

は、既に信心は止まっていると教祖金光大神様は仰せられております。では、教祖金光大神様は、このような時、どう思われたのでしょうか。

それは「どうしても自分は神様に届くほどの信心が出来ないのであるか……」と深くご自身を省みて、一層信心に励まれたのです。その結果、遂に天地の親神様に出遭うことが出来、何千何万の人々を救うことになりました。私達は「お蔭を頂きたい」と思えば、この教祖様のように、自分の信心が足らぬことに気付き、改まり、日々「お礼と喜びの生活」が出来れば、必ず大きな御蔭を頂くことが出来るのです。

令和三年の新春を迎え、改めて共に、そのような信心の稽古に勤しみたいものであります。